

哲学対話における発話後の質問ルール化の実践

—他の参加者の意見を良く聴くことを狙う—

堀越 睦（さろん）

1. 初めに

哲学カフェにおいて、参加者はどこまで他の参加者の主張を理解しているのか。筆者は街中の哲学カフェの進行役を約7年に渡り実践してきたが、常にこの問題意識が念頭にあった。

本稿の実践は、他者の主張に対する質問を重ねることがその理解を深めるという前提の下に、対話を深めることを念頭に置き、参加者の主張を他の参加者が良く理解し、疑問点をなくすことを目的としている。

そのために、「一人の参加者の発話（主張）に対して、他の参加者が必ず2つ以上の質問をしてか

ら次の発話に移る」ことを対話のルールとして冒頭に説明して対話を進めることを試行してみた。

2. 実践詳細

2. 1. 概要

所属する「さろん」という名の任意団体の7周年を記念し、4時間の拡大版として、初参加者3名を含む総勢18名で、主に、友達となるきっかけ、および、友達との関係性について対話をし、考えた。

2. 2. 質問ゲーム

実践の扉

参加者が発問に慣れるため、「もし魔法を一回だけ使えたらどんな魔法で何をしたいか？」という問いを使って、参加者を4つのグループに分け、計15分間程度に渡って質問ゲームを実施した。

2. 3. 本対話のルール

(1) 特別ルール

ゆっくりと進行するため、また、他者である他の参加者の話を良く聴いて理解するために、各参加者の発話（意見）に対して必ず2つ以上の質問をしてから、次の発話に移行することを説明して対話を開始した。

凡例～前半部）2.4項の文中にある“・”印は主張を、“Qn”印は主張に対する質問（n：質問の番号）を、また、“An”印はその質問に対する回答（n：回答の番号）を示している。

対話の途中で、質問する時間と

発話が可能な時間との境界が曖昧となり、混乱したため、途中から進行が逐次どちらの時間かを宣言しながら対話を進めた。

(2) 通常ルール

休憩後の後半部（本章(8)項以降）は、対話が2時間を経過していたことを考慮して、対話の流れを重視して、特別ルールの適用を止めて、通常通りに対話を進めた。凡例～後半部）2.4項の文中にある“・”印は主張を、“→”印は対する質問、あるいは、その主張を受けた新たな主張を示している。

2. 4. 詳細対話内容

(1) 問いの提起

進行から過去の哲学カフェにおいて「友達はたくさん作るべきか？」との問いで対話をした際に、「友達の人数は何人か？」と問われて戸惑った経験を紹介し「友達」について考えたいと提起した。

実践の扉

(2) 友達は人間だけか？～反応があることが大事

・友達と言うと、普通は人間を想定すると思うが、生きている人だけなのか。例えば、死んでしまったソクラテスや身近にいるてんとう虫は友達ではないか。

Q1 自分に対して相手から反応があることが大事であると思うが、相手の反応を確かめることが必要か。

A1 友達であれば何らかの反応がある。「これをやろう」という誘いに対して「嫌だ」というように、友達であればこそ、反応はネガティブな場合もある。

友達は、自分に何らかの反応があることが必要だが、自分にとっては、死んでしまったソクラテスも、てんとう虫も、反応があり、応えてくれていると思うので、友達と言っても違和感はない。

Q2 反応とは何か。「反応がある」ことと、「反応があると思う」ことは同じか。

A2 厳密な意味で客観を分からな

い（定義できない）と思うので、「ある」と「あると思う」は同じと思う。

(3) 友達は必要なのか？

・自分にとって、友達は、生産性を上げたり、得をしたりすることがない。生産性を上げる、または、得をすること以外は自分には必要がない。だから、生産性を上げる、または、得をするための手段としては、友達は要らない。

Q1 友達がいることが当然という前提で話をされているが、なぜか。

Q2 友達に生産性を上げることや、得をすることを求めるのか。

Q3 「生産性を上げる、または、得をするための手段として」友達を考えているようだが、友達は何かをするための手段なのか。「手段として友達を使う」ということができないから、必要ないと思っているのではないか。

A1-3 友達は手段ではない。効率性も求めない。だから要らない。

Q4 そこで想定している友達とは

実践の扉

どういう関係の人か？

A4 世間一般で言われているような、ネガティブなことも、自然とどうしてもよい話もできる人である。

Q5 そこで言う「生産性」や「効率性」には「好意」や「心地良い」は入るのか？

A5 概ね 50%は入るが、50%は入らない。入るとも入らないとも言えない。

・入るという答えであれば、無意識の裡にも「生産性を上げることや得をすること」を求めていることになるし、入らないと答えであれば、「どうしてもよい話をできる心地良い人」を想定して必要なのではという質問に繋げるつもりであった。

(4) 友達と自分はどのような関係なのか？

・友達とは、美味しい食べ物のようなものではないか。自分にとって、友達は、自分のことを最も良く理解してくれている人であり、

いつも自分とは反対の意見を言ってくれる人である。自分にとっては、一緒にいて気持ち良い人は、あまり意味がなく、常に反対の意見を言ってくれる人である。

Q1 友達とは、利害関係だと思っていたが、自然発生的であるため、あまりできない。どうやったらそういう関係になるのか。

Q2 いつどうやってその人が友達であると思うのか。

A1-2 よく分からないが、友達かどうかは自分の中で決める。

Q3 友達とはならないタイミングや他者はどういう場合か。

A3 自分に危害を加えることがある、あるいは、その可能性が高いと判断したときである。

Q4 何が決め手となるのか。

A4 行動する上で自分に似ている場合や、自分に付いてくる（互いが近付いてくる）場合である。

(5) 友達との関係性：合理性・効率性・取引 vs 愛着は区別できる？

実践の扉

・友達と、合理性、効率性とは関係がない。愛着として捉えられないか。

Q1 では、どういう関係性の人（関係性でない人）と友達になるのか。具体的にどういう関係性か。

A1 学校の同窓、会社の同僚、趣味仲間であり、その場合は効率性を高めることができる。

Q2 そういうメンバーは、仲間にはなれても、友達にはならない場合がある。生産性や効率性を高めるかどうかと仲間であるかどうかは少し食い違っているのではないか。

A2 本当にそうか。生産性、効率性を高めるかどうかは限定的な視点である一方で、仲間であるかどうかは大きい視点であるだけ（違わない）ではないか。

・仲間と友達は違うと思う（ベン図上の集合の絵のように重ならない部分を持つ）。

友人のケースだが、経営能力があって、金銭にがめつく、一緒にいると金銭的に得をする人がいた。

その人も友人にとっては友達であると言えないか。あるいは、「それは違う」と他人は言えないのではないか。

Q1 取引の関係にある人を友達と呼ぶのは違うと思わないか。

A1 生産性、効率性という言葉がきつからそう思うのであって、その人に、「褒めて欲しい」や「聞いて欲しい」と思うことは取引の関係ではないのか。

Q2 「辛いときに聞いてくれる他者」は友達ではないか。

ここで考えなくてはならないことは、取引がその関係性の条件になっているかどうかではないか。

A2 友達であることとは別に、取引関係のような目的がある場合がある。

Q3 では、独りぼっちな寂しさから逃れるために友達を作るとは、合目的的ではないか。

A3 孤独から逃れるために友達を作るとは取引か。そういうことはよくあるはずである。

実践の扉

(6) 何かを与えるだけの関係性か？

・利用価値のない人と友達になるのはなぜか。自分にとっては、何かを与えるだけの関係が友達である。友達には「幸せになって欲しい」と考えている。

Q1 もしそうだとすれば、夫婦や親子も友達とならないか。

A1 自分にとっては、そうである。

Q2 もしそうであれば、一方が友達と思っけていても他方はそうではない場合があり得る。例えば、一方から見ると何かを施すという一方的な関係であるが、他方から見ると金銭目的である場合が考えられる。あるいは、宗教指導者へのお布施もそういう一方的な友達関係と言ってしまう。

A2 その場合は、何かを施すことは必要条件ではあるが、十分条件ではない。十分条件は、自分（一方）の中でこの人（他方）を友達であると決めることである。ここには、愛情や好意（好きだと思ふこと）があることが関係している。

Q3 発生の起源について歯切れが悪い。それは自然発生的な関係性なのか。

A3 自分にとって「この人を友達と思えるかどうか」は、「この人と一生付き合っていけるという覚悟」を持てるかどうか。あるいは、その人の悲しみが見えたときである。

・考え方に同意する。現代は Facebook での「友達」等を考えると、友達の関係性が薄いと感じている。友達に対しては、特殊ではあるが愛がある。

Q1 今までの話を聞いていて疑問なのだが、友達にいきなりなるのではなく、時間軸があるのではないか。

A1 確かに他者との関係性は時間によって変化していく。これまでの友達の中には、親友から友達になった場合もある。友達とは、自分の生き方を知っているかどうかである。

Q2 自分の生き方を知っていないと友達にはなれないのか。知って

実践の扉

いなくてもなれるのではないか。

Q3 友達がいないと寂しくないか。

Q4 文学でも友達でも、友情・愛情の対象があれば、寂しくないのではないか。

A1-4 一方的に何かを与える関係性が友達であり、取引を目的にする関係性は友達ではない。

・その関係性の発生は、意図的ではなく、自然発生的ではないか。

(7) 友達になるきっかけ：その1

・何が友達になるきっかけなのかを考えてみた。一緒に長くいることがきっかけではないかと思う。→会社の上司や同僚は長く一緒にいる時間が長いが、長くいても友達にはならず、ダメな場合もあるのではないか。

→きっかけは、自分と同類である、自分と似た人であることではないか。

→大人の世界と比べて子供の世界では友達は違う。認定問題と呼んでいるが、もの凄く良く頻繁に遊んでいても、「あの子は友達で

しょう？」と訊くと「あの子は友達じゃない」という場合がある。子供は、大人とは友達の感覚が全く異なっている。子供では、「この子と友達になりたい」と宣言すると、「また会いたい」という力がある（意思が伝わる）。いつ頃から変わるのか。

→「悲しみを分かる」ことや「共感をする」ことが友達となるきっかけの一つとして出てきたが、一方で取引関係があるとダメ（友達にはなれない）は本当か。例えば、子供を預ける・預かるという関係性は互惠的であり、取引関係と言えるが、そういう関係性の他者同士は友達になりそうである。お茶をすることはなくてもいい場合がある。

→きっかけは安全か脅威かであり、安全な関係性が確認された上で、自分の中でこの人はと決めれば友達となる。

→安全であることは仲間についても言えることである。仲間は共同の目的があるが、友達には共感

実践の扉

がある。

(8) 友達という関係性

・友達という他者は、時間的に深まる関係性であり、互いの約束や愛情を持てるような関係である。
→一生の関係ということと言われたが、未来において友達であることを約束できない。友達と添い遂げるということは無理ではないか。

→時間軸を考えると、仲間→友達→親友という考え方はピンとこない。どういう関係性なのか。
→たとえ自分とは意見が異なっても、自分のことを良く分かってくれる他者が友達である。
→共有するものが自分の弱み・秘密であれば、友達になるのか。

・共通する周辺（目的等）がなくなっても残る本質だけになったときでも、一緒にいてくれる他者が友達である。

(9) 友達になるきっかけ: その2

・遊びがきっかけとなる場合があ

る。遊びは、それ自体が目的であり、その他には目的がないし、取引でもない。職場でも一緒に遊べば、友達となる場合がある。

→遊びがきっかけになるという
が、匿名によるオンラインゲームでも、友達となるきっかけとなるか。

→オンラインゲームを考えると、友達関係となるには、その本人に友情感がある（友情感を抱いている）ことが前提である。遊びができる関係は、特徴的な事項かもしれない。

・他者と仲良くなるために、自分から他者に言えない経験を開示することでそう（友達）になるという人がいるが、それもきっかけになるのではないか。

→きっかけは自然発生と言うよりも運ではないか。友達になるために自己開示をするということは何かを履き違えているし、ヤバイと思う。

→茶飲み友達は、友達なのか。

→きっかけはお茶飲みかもしれ

実践の扉

ないが、共通する目的（お茶飲み）がなくなっても一緒にいてくれるなら友達と呼んでも良いのではないか。

→その互恵的な関係性では「お茶する」ことはなくてもいい。もしなければ友達にならないかもしれない。

→私はお酒が飲めないが、飲める人達がお酒を飲みに行くと仲良くなり、その人達が友達同士となる場合があり、羨ましい。

→その場合は、お酒を飲むことが目的であって、友達になるかどうかは付帯的なことなのではないか。

・友達とは、交際する関係と言え、互いに援助し合う関係である。そこには、交際・信頼がある。

→共同の周辺環境（目的）がなくなっても、自分のありのままを認めてくれる関係が友達ではないか。

2. 5. 当日の進行役の振り返り

自分と友達との関係としては「共同の目的（周辺環境）がなくなっても、自分のありのままを認め、共感してくれること」が提起されたが、吟味する時間がなかった。異論を含めて、次の機会、あるいは、参加者・読者の黙考に委ねたい。

3. 終わりに

3. 1. 哲学カフェにおける対話内容の一期一会性

哲学カフェにおける対話内容は、その対話が行われる場所の雰囲気や参加者の顔ぶれ等によって、著しく左右される。仮に、もしも全く同じ問いを設定して、同じ会場で行ったとしても、その一回目と二回目の参加者の顔ぶれが一人でも異なるなら（ひよっとすると全く同じ参加者であっても）、その二回の対話内容が全く同じとなることは想像ができない。

実践の扉

理由は、同じ一人の人であっても、時を経るに従ってその問いに対する考えが変化をしていく可能性があるからである。

だから、哲学カフェにおける対話は一度として全く同じ内容になることはないであろうし、それゆえに、哲学カフェにおける対話は継続的に実践していくことに意味があるはずと考えている。哲学カフェにおける対話の内容は一期一会である。

3. 2. 本稿の実践アプローチ

本稿の実践は、もし科学的、かつ、客観的なアプローチを試みるなら、全く同じ問いを設定した上で、参加者も同じ顔触れを前提とし、二回を一連と捉えた実践をすることにより、一回目は発話後の質問ルール化はなし（ブランクテスト）、二回目はルール化をして（効果確認テスト）実施し、発話後の質問のルール化の効果を見極めるべきかもしれない。だが、

先述の哲学カフェにおける対話内容の一期一会性を考慮して、対照実験を行うことにはあまり意味がないであろうと判断して、対照実験としての哲学カフェは実施しなかった。

3. 3. 特別ルールの効果に対する考察

ここで、特別ルール（1つの主張に対する2つ以上の質問）の効果について、少し考察してみたい。

本対話の一部として、ある特定参加者の主張、および、質問への回答のみを抽出して以下に示す。

発話者が友達と仲間の重なる部分について、繰り返し「友達であっても、取引性のある要因を持つ関係性が成り立ち得る」ことを説明している部分である。これら質問と回答を繰り返し、発話者の考えている友達と仲間の集合論的な関係性について事例を引きながら、友達とはあまり関係性のない他の概念も引用しながら、他

実践の扉

の参加者へと説明して行く様子が分かり、参加者の理解が質問への回答を重ねるにつれて深まったであろうと推量ができる。

・仲間と友達は違うと思う（ベン図上の集合の絵のように重ならない部分を持つ）。

友人のケースだが、経営能力があって、金銭にがめつく、一緒にいると金銭的に得をする人がいた。その人も友人にとっては友達であると言えないか。あるいは、「それは違う」と他人は言えないのではないか。

A1 生産性、効率性という言葉がきついからそう思うのであって、その人に、「褒めて欲しい」や「聞いて欲しい」と思うことは取引の関係ではないのか。

A2 友達であることとは別に、取引関係のような目的がある場合がある。

A3 孤独から逃れるために友達を作ることは取引か。そういうことはよくあるはずである。

3. 4. 筆者（当日の進行）としての所感

3.2 節で述べた科学的アプローチの代わりに、本稿の哲学カフェ終了後に一部の参加者の方々から今回の対話内容に対する意見を収集してみた。その結果から、今回の実践が自分以外の参加者の意見を良く聴き、良く理解することに相応の効果があったであろうと筆者は推察している。

参考として、下記に一部の参加者からの意見を紹介しておく。

・普段のこの会の哲学カフェと比べて、質問のルール化によって、質問に対する心理的なハードルが下がり、そのためかは不明だが、途中で分からなくなることが少なかった。

・質問のルール化が義務に感じられて最初は少し抵抗があったが、途中から質問を考える裡に相手の言っている発言内容を良く理

実践の扉

解しようとして、普段よりも他の参加者の意見を一生懸命に聴いたような気がする。

・質問をルール化したことによって普段よりゆっくり対話が進行したと感じられたため、4時間に渡り対話した割には（長かったが）適度な疲労感であって、もう少し追加（一時間位）で対話できるような気もした。

以上